

風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.3

Think globally, act locally

「地球全体のことを考え、足元から行動しよう」
『風と雲の便り』は、そのような考え方に
あえて異を唱えたいと思います。

Think locally, act globally

「足元から考え、地球全体につなげて行動しよう」
でなければならない、と。

足元とは、そこに生活している人のいる
地域のことで。

この足元に起こっている問題を
考えつくすことこそが、
地球全体の行動につながっていくはずで。

考えることと行動することが

別々に離れてあるわけではないこと。

そして、野殿・童仙房は行動する場だけでなく
考える場でもあること。

このことを気づかせてくれます。

風の便り

「フィールド委員会の活動を振り返る」 公開報告会を童仙房の地で

きたる2月23日(金)～24日(土)にかけてフィールド
委員会の総括を行う公開の報告会を京都府南山城村童仙房に
おいておこないます。

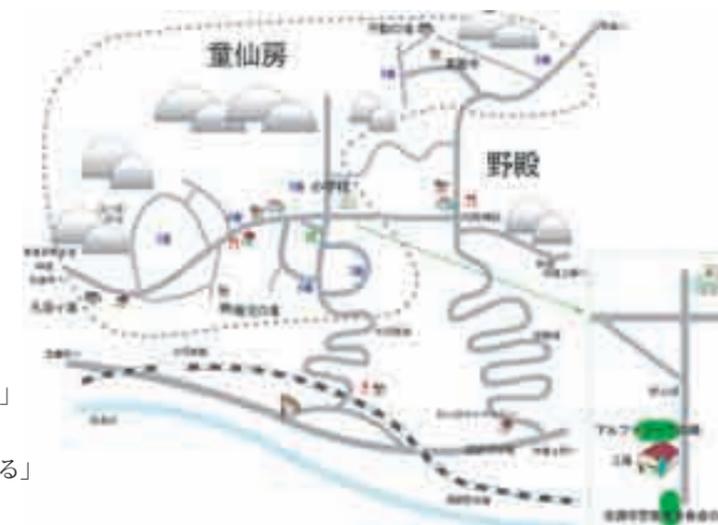
京都大学大学院教育学研究科のフィールド委員会は次の4
つのフィールドを軸にして活動してきました。これら4つの
フィールドを基盤に活動してきた教員と大学院生が一堂に会
して2年近くの活動を振り返り、次の課題に向けてのステッ
プアップを図りたいと思います。この報告会は公開ですので、
どなたでも聴講できます。奮ってご参加ください。

- 報告者：Ⅰ. 桑原知子 (臨床心理学)「女性のライフスタイル」
Ⅱ. 田中耕治 (教育方法学)「学校現場との連携」
Ⅲ. 前平泰志 (生涯教育学)「フィールドを立ちあげる」
Ⅳ. 金子 勉 (教育行政学)「教育行政の実際」

参加者：柴本枝美助手、各グループの大学院生

とき：2007年2月23日(金) 16:30～18:30

ところ：旧野殿童仙房小学校



「地域通貨」を知ろう①

地域通貨ってなに？——普通のお金とどこが違うの？

このたび、「地域通貨」に関する連載をすることとなりました。なお、この連載は、昨年8月に旧野殿童仙房小学校で行われた地域
通貨研究会の発表をもとにしています。今回は、まず「地域通貨」というものについて説明をしたいと思います。

地域通貨とは簡単に言えば、ある特定の地域のみで流通する通貨のことを指します。地域通貨の特徴は、日本円などの法定通貨である
普通のお金と比較して把握すると分かりやすいと思います。

まず、普通のお金は、為替などを通じて国際的にも使うことができますが、地域通貨はある特定の範囲でしか流通できないという特
徴があります。それが「地域通貨」と呼ばれる一番の由縁です。この「地域」という言葉は、野殿や童仙房のような地理的な地域だけ
を指すのではなく、インターネットでつながった人たちというような「むら」の意味も持ちます。

お金は、銀行などにあずけると利子がつきますし、借りると利息をつけて返すといったように「利子」
というものが関わってきますが、地域通貨は利子がつきません。地域通貨によっては、ただ持っている
だけでは価値が下がっていく(「マイナスの利子」といったりします)ものもあります。

お金は、ほとんどなんでも買うことができますが、地域通貨は何でも交換できるというわけではあ
りません。地域通貨が何に使えるかは、地域通貨を発行する組織が何を目的にしているかによって決
まります。例えば、ボランティア活動を促進しようとする目的で発行される地域通貨であれば、この
地域通貨で野菜を買うことは出来ないかもしれません。

お金は、為替に使ったり、銀行に貯蓄して保存できたりと、ものと交換するだけでなく様々な役割
を持っていますが、地域通貨は主に交換を促進するという役割を重視します。これはこの通貨の最も
基本的なはたらきです。

地域通貨の特徴を簡単に述べれば以上ようになります。ひとことで言えば、これらの特徴は、今
あるお金のあり方を批判的に考えて、通貨をより人間らしく生きることが可能な世界を作り出す手段
へと置き換えようとしているのです。

倉知典弘 Norihiro KURACHI 京都大学大学院



地域通貨で商いする日も近い？

今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「フィールド委員会」柴本まで
〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院教育学研究科
TEL:075-753-3030

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田199番地2
会長 中村富士雄/副会長 西村秀俊

2007年2月10日発行
発行：京都大学大学院教育学研究科「フィールド委員会」
プロジェクト「フィールドを立ち上げる」
編集：前平泰志
編集協力：安川由貴子
制作：(株)松籟社

収穫祭と「むら・秋の祭典」

『昔子どもだったおとなと今の子どもと未来の子どものための農業体験』から

種まきから収穫までを通して学ぶプログラムが始まったのは、8月26日。苗・種を植えた畑では、去りゆく夏を惜しむかのように日差しをいっぱい浴びて、野菜が順調に育ちました。新しい山土を使ったため、雑草はほとんど生えず、作業はもっぱら水やりと間引きです。大根、ハツカダイコン、カブ、ヒノナなど、間引いたその場で土をはらってほおぼるおいしさは、畑で作業しないと味わえません。

収穫祭を前に、10月下旬には、ハツカダイコンを収穫しました。旧・小学校施設で、間引き菜や収穫した野菜を使ってみんなで作った食事は、最高のぜいたくです。

11月18日は収穫祭。畑に実ったブロッコリ、カリフラワー、キャベツ、大根、ヒノナ、カブを軽トラックの荷台にいっぱい、収穫しました。初回から、大成功です。形が不揃いなのは目をつぶって……。

自分たちで育てた野菜を自分たちで収穫し、それを肴に夜更けまで語り合う。カリキュラムされた学びとは全く違って、まさにフィールドの醍醐味です。

南山城村が主催する「むら・秋の祭典」が11月23日に、高山ダム近くの総合グラウンドで開催されました。イベント当日、天気も良く、京大グループと地域の人たちが一緒になって収穫した野菜とバザー品を販売。同時に生涯学習の活動を広く知ってもらうため、活動資料を配り、ブースには活動写真を掲示しました。予想以上に興味をもって下さる方が多く、はやばやと資料はなくなり、ブースは大反響。



「むら・秋の祭典」へ出品



旧野殿童仙房小学校にて収穫祭会食



生涯学習推進委員会畑にて収穫



収穫した野菜

さて、肝心の野菜はというと……。心配をはねとばすかのように売れて、昼過ぎには完売。生涯学習活動の産物が評価されたわけです。

学びが、モノを創り、社会へ流通し、同時に学びも広がっていきます。田舎の小さな地域で始まった学びが、世界とつながり、世界へ広がっていく。1本のダイコン、1個のキャベツを通して、世界が見えるようです。

このプログラムを通じて、何を学んだでしょう？

命の尊さ、自然の不可思議、創ること、売ること、交流、本物の美味しさ……。

学びは、人それぞれでしょうし、必ずしも言葉や形に表す必要はないのかもしれません。

私たちが生まれて育つということは、生物としてみれば、大昔からの変わらぬ繰り返しでしょうが、私は私であるという尊厳と、変わりゆく時代背景とを併せ持つものでもあります。植物が育つということも、同じではないでしょうか。太古から連綿と続いてきた農業生産と、激動の近代。守っていかねばならないものと、拓いていかねばならないもの。相反する視点を共生させていくことこそ、大切でしょう。

農村の人と、都市部の人がいっしょに生産した野菜を、第三者が買う。農村の中にも、都市の中にも、これまでは存在しなかった切り口です。

生活を見つめること・生活から学ぶこと——鶴見和子の生活記録運動

猿山隆子 Takako SARUYAMA 京都大学大学院

鶴見和子とは誰か

2006年7月31日、社会学者である鶴見和子が死去した。享年88歳。柳田国男や南方熊楠の研究、カナダ移民や水俣病患者のライフヒストリー調査、地域に根ざした多様な発展があり得ることを論じた「内発的発展論」など、多様な研究を行ったことで知られる。また、和歌、日舞、着物などの趣味の豊かさでも知られている。1995年に脳出血で倒れて左半身が不随になってからは、闘病のかたわら、倒れた直後から湧き上がった和歌の創作で自らの経験を語ったり、これまで交流した人びとや学問的に響き合う人びととの対談を行ったりと、さらに幅広い活動を行った。

学問と生活をつなぐ

鶴見は、学問を生活経験からの知恵や思想と切り離されたものとは考えず、人間が生きている現実に役立つものにしたいと願い、まっすぐに人びとと向き合う姿勢と、学問の枠にとらわれずに、さまざまな分野に関心を広げ、それまで結びつかないと思われてきたものを結びつける自由な眼で、一貫して人びとの営みに関心を持ち続けた。さまざまな要素がモザイクのように組み合わせられた鶴見の世界は、エネルギーであり、その前向きな強い意志に圧倒される。

生活を記録すること

1950年代、生活を記録することは、おとなの「自己教育」の方法になると呼びかけ、紡績工場の女性労働者や東京で生活する女性たちとともに生活記録運動に積極的に取り組んだ。メンバーたちは、忙しい日々の生活の合間をぬって、持ち慣れない鉛筆を手に、農村生活の様子、職場の問題、母の歴史、戦争体験など、日常生活のなかでの経験や自分たちが蓄積した生活の知恵を具体的に書き綴った。それは、他者や集団から離れ、孤立し、閉ざされたものでは決してない。書き綴ったものをテキストに、仲間とともに読み合い、書き手一人ひとりの生活や抱えた問題について話し合う。一回かぎりのことではなく、納得のいくまで書き、批判しあい、考え直し、また書く、ということくり返す。こうした一連の行動によって、生活を見つめ、捉え直し、そこに浮かびあがる問題を把握し、自ら解決していこうとする姿勢を育てていこうとした。

根を深く、根を広く

生活記録運動は、鶴見の初期の仕事であり、膨大な仕事のなかの一つにすぎない。しかし、そこには鶴見の思想の根底が語られている。鶴見は、生活記録運動の実践を通して、「根を深くしてゆくこと」——地域や職場に根をおろし、生活経験を同じくする人たちと結びつくこと——と同時に、「根を広くしてゆくこと」——違った生活経験をもちあう仲間をつくってゆくこと——が必要であることを主張する。自分の問題が他者の問題にもつながっているという共感を支えにするとともに、違った生活や意見の交流をさせることで、他者の生活からその生き方を学ぶことで刺激を受け、ものを見る眼が大きく拓かれ、自分の生き方や考え方を鍛えることができるのだという考えである。

私たちは日々の生活のなかでさまざまな問題にぶつかり、その時々やり方で「よりよく生きる」ための工夫をしている。鶴見はそうした人間の営みを、より豊かなものにするために、「根を深くしてゆくこと」と「根を広くしてゆくこと」の双方向へと伸びていくことで、生活にしっかりと足をおろしながら、ものを見る眼を大きく拓き、さらに豊かな生を他者とともに拓いていく力を形成しようとしたのである。

思想の可能性と限界を問う

鶴見の思想には、私たちの童仙房での活動に結びついていく道があると思っている。地域に生きる人びとが結びつき、違った生活経験や意見をもつ人びとが結びつき、ひざをつき合わせて語ることは、互いに学びあうことであり、さまざまな可能性を秘めた豊かな創造への契機となるのではないだろうか。今回の報告では触れることはできなかったが、その後の鶴見の仕事の展開も検討しながら、鶴見の思想の可能性と限界を問うことで、新たな学びのあり方を考えていきたい。

(11月18日収穫祭でのお話より)